

かわさき生ごみリサイクル交流会だより

NO.7

2019年2月

発行：かわさき生ごみリサイクル交流会実行委員会

第7回かわさき生ごみリサイクル交流会

～生ごみも資源!農・花・人をつなぐコミュニティへ～

2018年12月1日、10の市民団体等で構成する実行委員会と川崎市環境局の主催により、第7回かわさき生ごみリサイクル交流会を幸市民館大会議室で開催しました。第1部はたいら由以子氏の講演。安全な野菜づくりに始まった生ごみ堆肥化の取組は、今や福岡市から全国へ広まっています。そして第2部は、開催地の幸区で展開されている生ごみリサイクルの事例報告でした。「夢見緑花会」の地道な活動と小倉小学校の生ごみ堆肥化の授業で、農地が少ない幸区でどちらも素晴らしい取組の事例を聴くことができました。

第1部 講演 『半径2kmの循環社会』

講師 NPO法人 循環生活研究所 理事長 たいら由以子氏

1. 安全な野菜を作るためにできることを!



生ごみ堆肥化を始めて21年。父のがん宣告で玄米菜食など食養生をはじめたのがきっかけ。父は2年延命できたが、当時は安全な野菜は手に入りませんでした。安全な野菜を作るためには土が重要と考え、母からの手習いでコンポストによる生ごみの堆肥作りを始めました。作った堆肥を活用するとおいしく、腐りにくい野菜ができ、微生物の不思議な力を実感しました。堆肥作りには土についてピカーの母が必要と、母と一緒に毎日出る生ごみを土に還すコンポストの研究を始め、ダンボールで、簡単に生ごみを堆肥化できる手法を生み出すことができました。

2. 生ごみ堆肥化の活動の広がり

野菜を育てるのに必要な三大栄養素のうちリンは枯渇することが予測されています。リンは生ごみに多く含まれ、栄養素も循環することから、安全な野菜が毎日食卓に当たり前に並ぶ社会の実現をめざし、生ごみを生活圏の「半径2km」で循環させる活動にこだわりました。2kmは自分事としてとらえることができる範囲で、自転車で行き来でき、顔の見える関係ができます。平成9年にダンボールによる生ご

み堆肥化の活動を始めてから、平成16年にNPO法人格をとり、以来年間300回の堆肥作りの講座や、人材育成に力を注ぎました。

NPO法人循環生活研究所
簡単に生ごみを堆肥化する手法のダンボールコンポストを開発し、福岡市を拠点に全国へ広める活動を行っている。

活動を始めた当時、博多湾は生活排水で富栄養化し、アオサが大量発生していました。アオサは当初福岡市が回収し焼却していましたが、活動の一環で堆肥化に取り組み、10年たった現在、民間の回収システムに移行しています。その他にもシルバー人材センターの雑草、町内会で集めた落ち葉などの堆肥



化にも取り組みました。生ごみは臭いなどの点で難しい点がありますが、誰もが毎日出し、栄養豊富で、一番魅力的な素材。ダンボールコンポストは簡単で日本、ネパール、などアジア全体で 200 名のアドバイザーが活動、継続率が上がっています。地域の人々が教えることが大事とわかり、毎年アドバイザー 1 泊研修で情報交換や実践講座も行っています。

3. ヒトゴト層をまきこむローカルフードサイクリング

福岡市内の小学校でダンボールコンポストの授業をすると、はじめは「臭い」とっていた子どもたちの生ごみへの意識が変わり、座学と実習のバランスをとりながら、いい学びができています。不登校と知的障害の生徒の多い学校での 7 年間の実践では、コミュニケーションの苦手な子が土の作業に参加することで話すようになるなど成果がでています。

これまで 8 万人に普及しましたが、依然として 1800 万 t の生ごみが焼却されているのが現実で、ミッションは実現しないのではと、人材発掘をして生ごみ資源化に向けた研究会を平成 27 年に開始、海外視察も行いました。ニューヨークのマンハッタンで行っている生ごみ回収は、行政がやるのではなく、7 つの NPO に助成し、実施しています。ロサンゼルスでは、ホームレスの人たちを雇用して、農業、野菜販売、レストランでの就労支援も行っています。

福岡で始めたローカルフードサイクリングでは、若い世代が多く、富裕層の住むアイランドシティで、積水ハウスとコラボして生ごみ回収と堆肥を活用し

たコミュニティガーデンを行っています。おしゃれなコンポストクルーで生ごみを回収、野菜と交換し、参加者の継続率 96% を誇っています。高齢化率の高い地域では、サロンに週 1 回収、見まもりも兼ねた活動を行っています。

ヒトゴト層を巻き込み、楽しい循環経済を作るとは、今後コミュニティづくりを行う上でもますます重要となると考えています。



コンポストクルーによる生ごみ回収

会場との質疑応答

- ・ コンポストに入れる生ごみは魚のあらやコーヒーかすもいいのか？
→貝殻以外何でもいいです。
- ・ 川崎区は場所がないが、都市部でのやり方は？
→小さなコミュニティガーデンが理想的ですが、公園などを活用するのも良いかと思います。
- ・ 畑はどのようにして調達したのですか？
→地域の人が間に入ってくれました。
- ・ 福岡市では行政の支援は？
→助成制度はありません。基材はかえって個人負担が良いと思います。
- ・ 回収はどのようにしているのですか？
→毎日コースと 3 か月コースがあります。

(門平きょう子)

報告 川崎市における生ごみの減量化・リサイクル推進事業について

(1) 生ごみの現状

日本の一般家庭では年間約 832 万トンの生ごみが発生し、うち食品ロスは約 289 万トンで事業系と合わせると 1 人 1 日あたり茶碗 1 杯分のご飯を捨てていることとなります。2015 年 9 月に国連で採択された持続可能な開発目標 (SDGs) では、その一つに食品ロス対策が掲げられ、生ごみの減量化は今注目を浴びています。

(2) 川崎市の取組

川崎市における家庭系ごみの約 4 分の 1 は生ごみであり、発生抑制とリサイクル 2 つの観点からの取組を進めています。



(写真は 10 月 23 日開催のごみゼロカフェの様子)

【生ごみ発生抑制の取組】

○ ごみゼロカフェで「食品ロス」対策

ごみゼロカフェで家庭での食品ロス対策の方法を話し合うワークショップや食品ロス対策に先進的に取り組む企業を紹介するセミナーを開催しています。

○ 食べきり協力店への参加の呼びかけ

小盛りメニューの提供や「食べきり」の利用者への呼びかけなど、食べ残しを減らす取組を実践するお店を認定し、紹介しています。

【生ごみリサイクルの取組】

○ 生ごみリサイクル助成制度の推進

家庭の生ごみを堆肥化し、地域の農地や公共の花壇で活用する市民団体の活動支援として、活動経費の一部を助成しています。

○ 小学校への生ごみリサイクル出前授業

生ごみリサイクルリーダーを派遣し、生ごみの堆肥化を学び実践する出前授業を、高津小、小倉小、住吉小、下作延小で実施しました。

(川崎市環境局生活環境部減量推進課 前田明日香)

第2部 幸区で実践している生ごみリサイクル事例

●夢見緑花会の花壇づくりと堆肥づくり 福島比代美さん

「夢見緑化会」は、2011年に日吉分館で開催された川崎市の「緑化講座」がきっかけで、その受講生5名で活動することになりました。「夢見ヶ崎公園入口ロータリー花壇」の提供があり2012年4月に会が発足。活動の花壇は3か所に増えています。

花植えは主に春と晩秋。月2回の定期手入れと水やりは当番制で実施しています。会員12名。2014年市民対象の緑化講座「花とハーブでリフレッシュ」を企画運営し、ハーブの育て方やハーブ料理を学びました。2015年・2016年の緑化講座では、川崎市生ごみリサイクルリーダーによる「生ごみリサイクルについて学ぶ」にて各2回にわたり、ダンボールコンポストによる生ごみリサイクルについても学びました。2016年「花と緑のまちづくり」を受講、わがまち花と緑のコンクールへ応募。自主緑化学習会（講師佐久間哲氏）を開催。2017年花と緑のまちづくりを受講し、4月～8月花壇ボランティア実践講座や花と緑のまちづくり講座受講、花壇見学会も実施しました。2018年生ごみリサイクル明治大学・川崎市連携事業報告会に参加、花壇ボランティア実践講座を受講中です。1月、10月、12月実施の生ごみリサイクル小倉小学校サポート事業に参加、子どもたちがリサイクルを学ぶお手伝いできました。

20年前に生ごみでの堆肥づくりを始めたときは臭いやその処理で大変苦労しました。今では、春先に虫が発生するなどの対応策もダンボールコンポストでは、箱にジッパー付きの不織布のカバーをかける対策を施すだけの対応で済むため、大変なこともなくなりました。悪臭もなくなり、花壇の土が黒くふかふかで、生ごみ堆肥が有効であることを実感しています。



●市立小倉小学校のダンボールコンポスト授業 川崎市立小倉小学校教諭 船木愛さん

小倉小学校のダンボールコンポスト活動は、5年生（3クラス）108人が総合的な学習の時間で「小倉環境プロジェクト」と命名した授業で10月から12月に実施しました。講師には川崎市生ごみリサイクルリーダーを招き、体育館で行いました。まずは、生ごみについての子どもたちに印象を聞くと、「きたない」「くさい」「食べ残し」などが出されました。そして川崎市のごみの処理には、沢山のエネルギーが使用されていて、CO₂が出され、税金が年間133億円使われていること、家庭系ごみの4分の1は、生ごみであることを知り、これらの生ごみをどうにか減らすことができないか子どもたちへ投げかけました。その後、ダンボールコンポストのやり方を実際に学び、家庭からの生ごみを持参して保護者の皆さんとともに3クラス6つのダンボールでスタートしました。

1週間後には子どもたちも、大きめの果物の皮も慣れた手つきで切り、小さくしていきました。記録表には、様子や気づいたこと、ダンボールの中に各自が入れたごみの量など、一人一人が記入しました。

3週間後、基材としっかり混ざり、4週間後には投入量もかなり増え、投入された生ごみの総量は291kgにもなりました。

1か月間の振り返りのまとめの授業では、子どもたちが感想を述べ、グラフでのまとめやコンポストの比較を行い、一緒に進めて頂いたサポーターの方々からもコメントを頂きました。生ごみのリサイクルは身近なもので、生活の中で活かしていける資源循環であることを確認できた共有の場となりました。

子どもたちにとって生ごみコンポストに出会えたことはとても有意義なことでした。

(戸高仁子)



開催にあたり 環境局減量推進課長 石原賢一

川崎市は現在も人口が増加している都市でありながら、市民・事業者・行政で協働してごみ減量化の取組を進めてきたことで、ごみの総排出量は減少しています。一方で、生ごみは現在でも主に焼却処理をしており、生ごみの減量化は廃棄物の減量において、欠かせない重要な施策の一つとなっています。昨今では「食品ロス」の問題も注目され、生ごみの発生抑制からリサイクルまで幅広い取組が必要とされています。本交流会は生ごみ減量における協働の取組を充実させる上で、大変有意義であり、今後の活動につながる交流の場となれば幸いです。

交流会を終えて 実行委員長 村山美香子

今回 7 回目となる生ごみリサイクル交流会ですが、川崎の南部での開催はかねてからの念願で、多くの方の参加が得られました。第 1 部は、生ごみの堆肥化では日本のトップランナーともいえる NPO 法人循環生活研究所のたいらさんのお話から、多くの方が出来ることからやってみようという気持ちになったのでは？第 2 部では、小学校での取組の様子を現場の先生からお聞きして、次世代を担う子供たちの貴重な体験を、つないでいくことの大切さを痛感。ますます堆肥化の輪が広がって行きますように！



「しんぼりファーム」の新堀智史さんが飛び入りで参加！

生ごみリサイクル交流会がめざすところの一つに、農業とのつながりという点で、今回の開催地である幸区での農業者との出会いはむずかしいのでは？と心配しましたが、なんと！若手の将来有望な方がいらっしゃいました。幸区では一番広い 3000 坪もの農地をお持ちで、8 代目となる 27 歳の新堀智史さんは、ご自分の子どもにつながる農業をめざしています。江戸時代は海だったこの地は、今でも地下水は塩分を含み、農業には適さないとのこと。畑で有機肥料も使ったことはありますが、近隣から臭いや土埃などの苦情が来て、今ではハウスでのイチゴやトマトの水耕栽培がメインです。毎週、火曜日と土曜日の直売が人気です。実行委員会有志で事前にお訪ねし、お願いしていたこともあり、交流会のこの日も土曜日でしたが、わざわざ会場にぴんぴんの青々としたハウレンソウやブロッコリー、真っ赤に熟したイチゴを持ってきてくださいました。都市農業を担う若手の生産者のやる気に満ち溢れたことばは、とても頼もしく感じられ、会場から暖かく大きな拍手がわきました。(村山美香子)

今年のティータイムはハーブティとビスコッティが好評



生ごみリサイクル相談コーナー



かわさき生ごみリサイクル交流会実行委員会 2018

委員長 村山美香子 (エコガーデンはるひ野)
副委員長 由良直子 (川崎市生ごみリサイクルリーダー)
飯田和子 (あさお生きごみ隊)
奥山玲子 (かわさき生ごみリサイクルの会)
加藤伸子 (野菜だいすきファーム)
門平きょう子 (環境を考え行動する会)
竹内ふみ子 (エコグリーンクラブ)
戸高仁子 (久地フレッシュグリーン倶楽部)
中村祥子 (川崎市生ごみリサイクルリーダー)
福田真 (社会福祉法人はぐるまの会)

柳下博子 (幸・循環型社会を考える会)
吉田賢治 (EM 普及活動研究会)
和田三恵子 (川崎市地域女性連絡協議会)
事務局 (川崎市環境局減量推進課) :
石原賢一減量推進課長、東陽一係長、前田明日香
連絡先 : 川崎市環境局減量推進課 電話 044-200-2605
〒210-8577 川崎市川崎区宮本町 1

かわさき生ごみリサイクル交流会だより第 7 号編集
村山美香子、飯田和子、門平きょう子